

日本人と儒教（3・3・16）

堀江 保藏（大14・文甲）

大正十四年に卒業しました堀江でございます。私の専門は経済史、特に日本経済史なんですけれども、特に江戸時代の経済のことをやっておりますと思想方面をやらないとわからない。その思想が儒教思想なんでございます。ところが最近になりました、この、日本の儒教が非常に重要な意味を持つておるといふことに気がつきました。それは、第一点は日本人の人間形成に非常に大きな役割を演じておるといふことでございます。江戸時代から始まりまして明治の終わり、或いは大東亜戦争あたりまでですね、日本人の人間形成ということに重大な役割を演じました。西洋ではキリスト教が人間形成に役割を演じておりますが、これは前世から現世を経て来世へ至るまでキリスト教一本であります。ところが日本では「神・儒・仏」三道によって人間形成が行なわれました。特に現世ですね。現世におきます物の考え方とか行動の仕方とかいうものに対して規範となりましたのは、主として儒教でございます。で、この人間形成はどんな人間を形成し

たかは後で申し上げますが、それが第一点。それから第二点は、いわゆるアジアNIEsと総称される国々、例えば韓国、台湾、香港、シンガポール、すべて儒教国であります。で、日本も近代化の過程におきましては、全部儒教で通した国、儒教が教育思想の根本になった国でございます。台湾についてみまするといって、そこにおまわりましたように、これは昭和大学の教授でコウシヨドウという方ですが「台湾爆発力の秘密」という中に、台湾経済が朝鮮に十年も先んじて発展しておるその根本を支えておるものに四つの柱があると。その第一は日本の植民政策が非常に良かったからだ。道路、鉄道、港湾等のいわゆる経済基盤を整備してくれた上に教育というものを普及させかつその程度を高めておること。第二は儒教国であるということなんであります。で、韓国につきましても学者が儒教と資本主義との関係、経済発展との関係を論じておる人がありますが、そこで申しましたのは三星^{サムスン}という人がございます。この人は「市場は世界にあり」と大立者、或いは総帥でイチョンピョンという人がございます。この人は「市場は世界にあり」という書物の中で、自分の企業経営の上での唯一の座右の書は論語であるというておるんであります。ちょうど日本で明治から昭和にかけて財界の大御所とうたわれました渋沢栄一さんが自分の座右の書は論語であると称して論語を愛読し、自らも「論語経済論」という書物を書いておられるのと軌を一にしておるのであります。

次に、儒教は四々五世紀に漢字と共に当時の中国から入ってまいりました。しかし平安時代末

まではいわば雲の上の学問でありまして、それが地上へ降りてまいりましたのは鎌倉時代に入ってからでございます。で、この鎌倉時代に誰がもたらしたかといえ、主として禅僧であります。禅坊主が朱子学をもって帰ったのであります。で、ご承知のように禅には例えば日蓮宗における法華経のようなよるべき経本というものが、お経というものがありません。そこで自分の身の修養として書をかく、或いは絵を画く、或いは中国の儒教の書物を読む、というようにして自ら修養したものでございます。そういうわけで禅宗の坊さんが朱子学をもたしたのであります。ところがこれにとびついたのは武士でございまして、禅の気持ちと武士の気持ちが一致したんであります。それで武士がだんだん禅をひろげたと書いてもいい程、武士と共に禅は、禅と共に儒学は普及してまいったのでございます。ところが南北朝を経まして戦国時代になりますという戦国諸候の中には成り上がり者もございました。その人達は、家来とか領民に対しまして「自分はただ者ではないぞ」ということを示す必要があった。そこで何かその、自分より上の偉いものをもってこなきゃならん。はじめは民間信仰のお天道さまとかいうものをもってまいりましたが、これはどうも論理的にうまくいかん。で、次にもってまいりましたのがキリスト教で、当時ポルトガルから入っております。あのキリスト教をいれたんですがこれにもちよつと具合の悪いことがある。自分の家来が自分よりも主を信じたら、キリストを信じたら一体どうなるか。ここが具合が悪い。そこで、この朱子学をもってきたのであります。で、江戸時代に入りましてその朱

子学が官学になると共に陽明学が入ってまいります。また古学も出現してまいります。元禄、享保時代はまさに儒教の花盛りという時代であります。で、武士道と儒教と、どういう関係になったかと申しますと、中国では「孝」が先でありまして、例えば親が死んだ時にその亡骸を入れる棺の板の厚さが厚ければ厚い程、これは親に対する孝行のしるしだ、と云うておったんですが、日本はそれをひっくり返しまして「忠」を先にもって来たんです。「忠」を優先させたのであります。この辺が、武士道が儒教に着目した非常に重要な点でございます。そこでは五倫五常の徳というものが非常に重要視されたのでございます。

まず、儒教の三派の説明に入りますが、まず朱子学は、宋の朱子を祖としております。「天」これ「太極」ともいっておりますが、ご承知のように韓国の国旗はですね、この「太極」を圖案化したものなんです。で、この「太極」、そしてこの「理」と「気」の二元論でありまして、この二つのものの組合せによりまして、陰と陽と、五行は木火土金水と申しますが、その陰陽五行が生ずる。そしてさらにこれらの組合せによって宇宙万物のいろんなものが出来る。その中で天に型どって作られた人間というものが万物の霊長である、と云うことになるのでございます。そこで格物致知、物に格^{いた}り知を致すという、こ^ういうこととか、あるいは正心、誠意、修身、齊家、治国、平天下の理想像を描く。で、その中でえらい人は藤原惺窩、これは相国寺の僧でこ

ございました。その弟子の林羅山は建仁寺の僧でございまして、幕府の大学の頭に任ぜられた人です。その他に新井白石、山崎闇斎、中井竹山、貝原益軒らがあります。

二番目の陽明学派は、これは明の王陽明を祖とする学問でございまして、理氣一元論を説くわけです。「理」は心の条理である。「理」を極める方法としましては、その実践。それから「知行合一」ということを非常にやかましく言うんであります。そしてこの派の学者には中江藤樹、熊沢蕃山、佐藤一斎、大塩平八郎がここにあります。「知行合一」ですね。で、梁川星巖とか真木和泉、吉田松陰、西郷隆盛、渡辺華山、佐久間象山というふうな人がおります。

古学派というのは、これは日本でできた学派でございまして、周公、孔子あるいは孟子の原典に還れと、聖人、古聖人、例えば「四書五経」というふうな古典に還って検討しないとだめだ。周公、孔子の人徳に接しなきゃだめだというんで、古典に還れということをお説くのであります。従って、これは歴史的存在であると同時に現実に深い関心を寄せるということになります。で、この方の学者には山鹿素行、これは浅野家のお師匠であり、儒学と同時に兵学を教えた人です。大石良雄は山鹿流儀の陣太鼓を打ちならして吉良邸に討ち入りしたと申します。それから伊藤仁斎、荻生徂徠、太宰春台、それから海保青陵らがあります。ここで若干この太宰春台と海保青陵について説明をくわえたいと思います。

元禄時代の華美の後をうけて享保時代は非常に財政が逼迫してきた時、幕府も諸藩も財政が困

難になった時期であった。で、この時にこれを何とかしなきゃならないという風に考えたのが例の名判官の大岡越前でございます。大岡越前は殖産興業でなければだめだ。俵約ばかりしていてはどうにもならん。ということ吉宗に進言したのであります。吉宗はそれを直ちに受け入れまして、自ら日光に薬用人参を栽培しまして、その種を諸侯に頒布する。でこの種をもらい受けまして、薬用人参を盛んに栽培しましたのが松江藩でございます。ここでは大々的に人参を栽培して、単に大阪へ売り出すばかりでなしに中国へも、清の国ですな当時は、清国へも輸出するということまでいっただいいます。「殖産興業をやれ」と号令をかけた。ふるさと創生指針をだしたんじゃないんであります。で、この号令がよくききまして、諸藩では自分の国々に特産物をつくりだした。そのためにどういう風にしたかと言いますとですね。国産会所とか産物会所とかいう風な名前のものを置きました、これを、藩札をもって、主として農民であります、生産者に前貸しをするんであります。そして、これからここへ買い上げる。そしてこの買い上げた品物はどこへもっていくかという、主としてですよ、全部じゃありませんが主として大阪の諸藩の蔵屋敷へ持つて行く。ここから大阪の諸問屋に売るわけですが、これを特に「蔵物」と申します。それで一般の庶民が売りますのを「納屋物」と言いましたんですね。それで、この方がどうも品質が少し良かったらしいんで、高い値段で売れたようでございます。こうして売った代金というものはですね、どういう風になるかと言いますと、金銀貨幣、つまり正貨でこれを受け取るわけ

であります。そうしますとですね、仮にですね、この値段とこの値段とが、買い上げ値段と売り払い値段が同じであってもここで藩は非常なもうけをします。ということは、国内でしか通用しない藩札でもって買って、天下に通用する正貨を得るんですから。で、これでもって参勤交代の費用とか、あるいは江戸藩邸の維持費にあてる。こういう風にする訳であります。

ですから、なにも創生資金を出さなくてもですね、一生懸命この「殖産興業」につくすのが当然だということになるのであります。で、この販売数量を確保するために専売をやります。領内での一種の独占ということでありまして、で、専売やりました藩ですが、二百数十藩の中で約四分の一、六十数藩というものが藩営専売をやっております。で、専売商品には紙と蠟が非常に多いですが、木綿織物、麻織物、絹織物、それから生糸、それから茶、畳表、藍玉、砂糖、それから……。という風にいろんなものがございまして。この近所の藩で申しますと、亀岡藩は布団の中入れ綿を専売して、で、園部藩は綿とかを専売するという風にして、これは主として京都の下屋敷から売り出したようであります。で、この専売が非常に苛酷になりました場合には百姓一揆がおこったという例もありますけれども、概していえばこれは成功しまして諸藩が幕末にいたるまでその存在を維持した大きな経済的基礎というものは、この国産奨励にあつた訳でございまして。この国産奨励、国産専売などのことを口を極めて論じましたのが太宰春台でございまして、太宰春台の、のこりを拾うという字を書きますが、この「経済録拾遺」という書物にこのことがはつき

りとくわしく書かれてあります。で、私はこの太宰春台をもって日本における経済政策学者の最初の人だと、こういう風に思っておりますのでございます。

その次に説明したいのは海保青陵であります。そこにもまわりましたが「何々談」というのが多いんですが、これは講演してまわったのを弟子が筆記した、それが残っておりますのでありまして、一番この徹底しておるのは「稽古談」であります。で、この「稽古談」につきまして注意すべき点が二つあるのであります。一つは先程「古典に還れ」ということを古学派が説いておると申しましたですけども「孔子と孟子は乱世に出た人だから今の天下泰平の我が国には通用しない。よろしく周公に学ぶべきだ」という風にして学問の相対性を主張したという点で、これが第一でございます。第二はこういう風なことを言ってるんでございます。「君臣は市道なり」と。物の売り買いじゃないかと。それで武士は物を売らぬものとするから貧乏になるんだと。決して売ることは恥でないんだ、ということをおっしゃるのであります。この関係はここへ、この禄を売る訳ですね。ここが買うのは、まあ「力」と言いますか「働き」と言う方が良いでしょうね。それからこの関係が今度は左右にこう転換いたします。というか現代の平民的な、あるいは民主的な取り引きになってまいります。で、この関係がですね、90度回転をすると、その回転をさせたのは何かと言いますと、これは商取引であります。商取引がこれを回転させておる。西洋で申しますと、初め農奴はですね、封建領主の土地を耕すという代わりにその封建領主の土地を

ですね、自分の労働で、まあ週に二日とか三日とか捧げて耕しておるんでありまして、ここでは労働地代ですね。それから今度、領主はこの労働を管理したり農民小屋を建てたりするのは面倒だということで、物をくれ、物納ということになります。物納ということになりますが、物で買うとまた自分で売らなきゃならないということで金納ということになります。こうなれば農民は自分の作った物をどう処置しようと自由になります。これがいわゆる農奴解放の過程でありまして、ここに至ってはじめて土地への緊縛から解放されると。こうして封建制度というものがなくなるんでありますが、知らぬ間に農奴解放が行われる。で、西洋でいえば十四世紀から十六世紀へかけてのことでございます。で、このような封建制度をもったのは西ヨーロッパ諸国と、東洋では日本だけなんです。韓国にも中国にも封建制度とか封建社会というものはありません。で、封建社会というと何か悪い社会のようにみえますけれども、これがあつて初めて、その基礎の上に資本主義経済というものが花を咲かしておるんですね。

これの一番極端に反対の例を申しますと、ロシアです。ロシアは十九世紀の中頃まで完全な農奴制社会でございました。上は皇帝から下は下級の官吏にいたるまで、それぞれ身分格式に應じた土地を持つておる。そして完全に農奴に、それぞれに付属した農奴に耕させておるんであります。ところが十九世紀中頃っていいますとイギリスなんかではすでに産業革命の時期を終つて、そろそろ生産も軽工業段階から重工業段階へ進み入ろうとした時代であります。で、ロシアの皇

帝はそれを見て、自分とこも西洋流にならないかん、という訳で、そこで資本家をつくり労働者をつくらにやならんということになりました。で、資本家をつくるにはどうしたらいいかということ、もとの封建領主にですね、資本を持たせる。で、片一方、農奴から労働者をつくりだすにはどうすればいいかっていうと、その農奴主はその地主の土地を買わせるのであります。ところが買わせようとするんですけれども、農奴にそんな金があるはずがない。そこで国家が貸してやるんです。そうすると今度はもとの地主の代わりに国家が農奴主になる、と。で、この農奴を「負債農奴」まあ、ロシア語では「カバール」と言うようですが、そうして二十世紀の初めまでやってまいりました。二十世紀の初め六七十年頃に、ちよつぱり資本主義らしいものがでてくるんですけれども、まもなく、数年すると、いわゆる共産主義革命がおこった、そうするとですね、当時のロシアでは、この封建社会の経験も、資本主義社会の経験もないんです。いわゆる「ペレストロイカ」というものが、どんなビジョンを持ってすすめられている政策か存じませんが、とにかくその目標に到達するにはかなりの、私は困難が伴うと思っております。というのは、今申しましたように、封建社会の経験も資本主義社会の経験もないからであります。

そういう風なことでありまして、で、古学の他に水戸の水戸学とか、土佐藩の南学とか、それから熊本の実学という、いわゆる地方的特色をもった儒教もあらわれた訳であります。そこで、最後に私は日本人の、これはひとつの大きな特性だと思っております「創造的模倣性」。日本人

はよく真似をする国民だ、というんですけれども、決して真似の段階にとどまっていなくて、そこから必ずや一歩も二歩も抜きん出るのであります。手近な例を申しますと自動車があります。私達記憶しておりますが、昭和の初めには、大阪にジェネラル・モーターズ、横浜にフォードの工場がありまして、小型の乗用車を作っておりました。日本の国内、すべてこの二社が販売しておったものであります。日本に自動車産業がおこりましたのは、終戦後十年も十五年もたつてからであります。ところがそのアメリカの真似をしてつくった乗用車がたちまち本国のアメリカの乗用車にいろんな点において勝つたものが、優れたものが出来る。燃費は少ない。堅牢である。第一値段が安い。そこでアメリカ市場へどつと流れこんで、アメリカから輸出規制をしろ、という要求さえ受けるようになったのであります。こういう風な例は、自分達の身辺を振り返ってみますと幾らでも、私は数えることが出来る。皆さん、どうぞ数えてみて下さい。ところで、私ここで声を大にして言いたいのは、平安時代の日本人が漢字から平仮名と片仮名をつくってくれたことです。もしも私達が今日なお万葉仮名という風なものを使っていなければならなかったとしたならば、日本の文化というものは一体どうなっておるか、考えてみただけでもゾツとする次第でございます。このありがたい平仮名、片仮名のおかげですね、我々の文明は榮えておる。韓国では諺文というものを作りましたが、中国では仮名というものはございません。

で、次の国家論へまいります。これは天下と国家とで、將軍のことを「大君」と呼んでおります。すでに天皇は統治権を將軍に委任しておられまして、大君という風と呼んでおりました。諸大名のことを「国君」と言い、併せてこれを「人君」と言っております。これは「すべてが天からの預り物だ」と考える、この「預りの思想」というのが非常にこれは重要な思想でございます。例えば企業にしましても、我々は企業は天から預っているんだという考え方がないと具合が悪いと思うんですが、そういう風なことでありまして、それで「君」の天職は仁政を行うにあり、ということ、「仁政」、これは「民を慈しむ」ということですが、具体的にいえば「民をして飢寒の憂いなからしめる」ということだろうと思えます。今日、テレビジョンに出て参ります水戸黄門さんが、もしも政局を担当していたとしたならば、「仁政」を行ってくれておるだろう、と思うのであります。ところが、水戸黄門さんがやはり一人ではダメで、助さん、格さんとか、その他の家来を持たないと自分の思う理想が達せられないと同様に、「人君」は、如何に「人君」でありまして一人ではどうにもならん、これを補佐する人がなければならぬ。これが「臣」つまり武士階級であります。武士階級は、もう平和な時代にありまして戦闘階級よりもむしろ教化階級である。「教化風俗よるところ」という言葉がございますが、民の模範にならないかん。お手本にならにゃいかんというのが、この、武士の役目でございます。「君を助けて仁政を行わせる」で、下に対してはお手本になる。これが一般武士の天命でございます。で、

庶民、つまり農・工・商の天職は、衣食住に必要な物資を生産し、および有無相通じることであり、君は精神、民は肉体、一種の「国家有機体説」といつてもよろしいのでございます。で、三者共によく勉強せにやならん。学ばねばならん。で、国家目的は徳治国家の実現をいうのであり、後には「富国強兵論」も現われてまいります。

社会構造としましては、これは国家構造の社会的側面でありまして、身分社会の肯定、それから農本商末。農民は国のものである、ということでありまして、農民は常住のものであるということですね。武士も同じ常住のものである。町人は不定の渡世をするものである。常住のものが生活に困難にならないように、困らないような社会を実現するのが政治の根本である、と。で、社会の構成単位はといいますと、これは個人ではなくして家である、と。この「家」の考え方は儒教ではございませんで、日本固有の考え方でありまして、氏族時代に端を発するところの伝統的な思想であります。国、家を重んずる。何々家という家を重んずる。こうなりますと部分は全体に奉仕するということになってまいります。

で、最後の項目である、経済論へまいります。これは「経国済民」あるいは「経世済民」ということでありまして、世を治め、民を救う。「済民」というのは仏教用語でいえば「衆生済度」

と同じような意味じゃないかと思ふんであります。安穩にこの現世から来世へ渡らせるといふ、こういう意味でありまして、この「経済」は今の経済とは意味が違ひまして、いわゆる今の言葉で言えば「ポリテクカル・エコノミー」にあたるかと思ふんであります。そこでは「利用・厚生・正徳」というのが盛んに唱えられまして、経済の窮極の目的は、先程と同じように道德国家の実現でございます。

で、次に儒教の普及といふこと。ここでまた少し時間をいただきたいと思つております。で、学校には昌平黉、幕府の昌平黉があり、諸藩には藩校が、大抵の藩が藩校を持つておりました。で、郷学校、町や村の学校があります。それからいたる所に寺小屋があります。それから学者の私塾もあります。学者の中の私塾で有名なのは伊藤仁斎及び東涯の堀川塾、これは今の堀川今出川上るあたりにあつたこの堀川塾。それから三宅石庵といふ人と中井釐庵といふ人がつくりました懷徳堂といふのがあります。それから吉田松陰の松下村塾。これが有名であることは申すまでもありません。ところがその頃、心学といふものが幕末に出てまいりまして、この心学は儒教の教えとか精神とかを一般大衆に平易に説くのが目的でありまして、従つてこれが儒教の普及に非常に大きな役割を演じておるのでございます。で、日本人の識字率を申します。これは日本人じゃなくイギリス人が調査した結果なのでありますが、識字率が約50%にのぼつておつたとい

うんであります。当時の世界のどの国みても50%なんていうのではないのだそうでありまして、それほど日本の学問が、教育が、普及しておったと申しますか、それじゃその水準はどうなのかと
いいますと町人学者が出現しておる、ということでもまず注目すべきであります。で、今申しまし
た心学の祖が石田梅岩であります、この人は丹波の人であります、京都の商家に奉公に出
ております。この人は自分で非常に勉強しまして、「都鄙問答」という書物を書く。自分でまた心
学講舎を設ける。そして他の講席へ、出張もするという風にしてこの心学を説いてまわったもの
であります。で、この心学は梅岩のこれを中心としまして、京都には手島堵庵とか柴田鳩翁、そ
れから大阪に波及する。ついで江戸へも出る、とゆう風にかなり心学が上方を中心にして出てお
るんであります。また、町人学者では、ばんとうと読むんですが、山片蟠桃がおります。大阪の
両替商の「升屋」というのが、こういう字を書いて「ます」と読んでおるんですが、これは大阪
の両替商であります、その番頭さんであります、この人は非常によう勉強した人でありま
して、そこにまわりましたが「夢の代しろ」という書物を書いております。この書物を見ますと
と天文から地学からですね、倫理から国学とか制度とかいろんなことを書いておるんであります
ね。ところが注意すべきは、皆批判的に書いておるんであります。天文学においては天動説を排
して地動説を取る。それから国学と本居宣長の天孫降臨の説に対していろんな自分の批判をくわ
える、という非常に批判性に富んだ人で、よくこんな人が出たもんだ、と。もしも現代こんな人

が、批判的なことを言う人が出たら愛読書になっておるだろうと思っんです。それが一商家の番頭さんなんですから偉いもんだと思っんです。こういう風にして如何に教育水準っていうものが高かったということを示しておるんであります。

もうひとつ、一般大衆はどうかといいますと、「鮮い哉銀」ということがあります。これはこういうことであります、ある儒学の先生のところへ泥棒がはいったと。たちまち弟子にとつつかまったと。で、そこで先生はですね、自分のそばにあった束脩と申しますか、これは何かあの入門札的なものだそうであります、この紙づつみを渡してですね、そして懇々と不心得をさとして、そして「出来ればこれを持って正業に就く足しにしろ」と言うて渡すんであります。で、一度はそれをおしただいたんですが、ちよつと開いてみましてグツと先生の方へ差し出しまして「すくない哉銀」と言ったんで、これがわかっただけであります。当時の人にですね。まあこれは申すまでもなく「巧言令色鮮い哉仁」のもじったのであります、これが当時の民衆にわかつたというんですから当時の人々の知的水準の高さというものが、ほぼ窺えるんじゃないかと思っんであります。

こういう風なことでございまして、そこで最後の歴史的意義へまいります、先ず政治的にはこの幕藩体制を支える四本柱のひとつとして大きな役に立った。四本柱のひとつは儒教の普及と

いうことと、それから幕藩体制というものが現代に近い官僚制的な統一組織を持つておったということと、それから貨幣経済と土地経済が均衡を保つておったということと、それからもうひとつは鎖国という縮金によってガツチりこう締められておったんで、それで幕府というものは二百年の間長持ちしたということになります。

それから二番目は学問的頭脳を養つたんでありまして、ことに朱子学が論理的な思考といひますか、朱子学の論理的思考つていうものが、非常に学問的な、論理的な頭脳を養つたんでありまして、この点は明治二十年代に三宅雪嶺という博士がですね「日本及日本人」という雑誌の主宰をしておりましたが、その中で「日本人の論理的な頭脳を養つたのは主として儒教である」いや「朱子学である」ということを申しておられるんであります。また国学は、本居宣長をはじめとして興隆いたしましたですが、これに主として刺激を与えたのは申すまでもなく古学であり、古学派の考え方であります。それから例の「解体新書」をあらわしました杉田玄白という方、この人は自ら自分がこうして実地の蘭学をやつて、「この現実的な医者の仕事をしておるのは、これは古学のおかげである」ということをはつきり自分で書いておられるのでございます。こうして後に、洋学受容の基盤となつたということですね。まあ三者ともですね、洋学を受入れるのに非常に役立つた。で、その中で特に偉い人は幕末に出ました福沢諭吉さんでありまして、まあ、儒教の家に生まれまして蘭学を学んだ。そして大阪に適塾という塾を開いて多数のお弟子さんをと

った。で、しまいにまあ、慶應義塾を創設する、ということになるのでございます。

で、三番目であります。時代時代に応じて社会の各方面に有能なリーダーを輩出させた、と。そのフォロワーとの関係を円滑にする。もって国家と社会とがはなればなれになるのを免がれしめたということでもあります。国家社会の遊離といえますと、違う方の例を申しますと清国でありまして、国家と社会とが遊離してしまっておるんであります。で、これが清国が近代化において遅れたひとつの大きな理由ではなからうかと私は思っておるんでありますが、ところが今申しましたように遊離を免がれると、維新となり、後に申します近代企業家というものを輩出させた。要するに儒教は神道・仏教と相俟って日本人の人間形成に大きな役割をはたしておるのであります。せいじやどんな人間形成が行なわれたのかといえますと、ひとつは「勤儉節約」ということであります。もうひとつは「国のため」或いは「家のため」という型の人間集団主義的な人間を作りだしておることでもあります。

もうひとつは企業家を輩出させておることでもあります。企業家といえますと、何かこの経済のことだけのようにはみえませすけれども、決して経済の面だけでなしに芸術であろうと文学であろうと何であろうと、自分から創造的につき進んでいこうとする人は皆、企業家タイプの人だと私は思うのであります。しかし私は経済学をやったもんですから、ここで経済のことだけを、経済界に現われた企業家だけを、若干例を挙げて説明したいと思えます。企業家と申しますのはドイツ

の学者のシュンペーターという人によりますという、「変化に対して創造的に、クリエイティブに反応する人」と。「クリエイティブ・レスポンス・チェンジ」という言葉を申しております。つまり需要が増加したとか、新しい技術が発明されたとか、新しい素材が出来た時にそれをすぐに企業化していく。それに資本を投下して企業化していく。こういう積極的な人を企業家と申しまして、これに経済発展の立役者の地位を与えておるのであります。そこで日本ではどうなのかと言いますと、そこに、まず第一に挙げなければならぬのが、前島密ということであります。彼は越後の郷土の子弟に生まれまして早くから英学を学びました。で薩摩藩に仕えて藩土の子弟に英語を教えたりしておりましたが、その藩土の勧めで政府に入りまして駅通局というところに出仕するんです。で、ここでこの前島の功績が三つあります。ひとつは東京遷都論を説きまして、これは堂々たる議論でありまして大久保利通の大阪遷都論をしのいでですね、東京遷都を実現させたということであります。ふたつ目には鉄道をおこそうという、東海道線をつけるのについての詳しいもくろみ書を出しておるのであります。このもくろみ書が、後に政府が鉄道、東海道を敷設する場合の非常に重要な資料になってくるのであります。みつ目は郵便制度を創設したことあります。その頃のこの中央政府と、大阪などとの間に往復する文書は相当の数にのぼりまして、従って費用が非常に高くついておる。もしもこれをイギリスの制度にならって郵便制度にしたならば便利になり、又、官ばかりではなしに民も利用出来る、と。官民共用の制度にな

るからこれをやるべきじゃないか、ということを上司に進言したんですね。で、上司もこれをいれまして、で、前島はすぐイギリスへ参りまして、自ら郵便制度を視察して、そして帰って来て明治四年に、郵便制度を創設するのであります。これが郵便制度のはじまりでありまして、ところがこれによって仕事を失ったものが沢山あります。つまり飛脚問屋であります。そこで前島は東京と京都と大阪の飛脚問屋をよびましてこれからひとつ貨物輸送の専門企業になったらどうか。でまあ、この勧めに応じて陸運元会社というのが出来ました。で、これは陸運会社の元締めという意味でありまして、諸街道の宿駅の問屋番が転身しました。陸運会社の総元締めということで、陸運元会社が出来たのが、明治五年のことです。で、これは日本で最初の株式会社であります。今日の日本通運の前身であることは申すまでもありません。

政府には、もひとりこの上に大久保利通という偉ものがおりまして、明治四年に大藏卿に就任しましてからは、日本の殖産興業政策がにわか活発になってまいりました。これも非常に偉大な企業家だと私はみております。

民の方に移りまして、石河正龍という方がおります。これは大和の高田の儒者でありまして、青年時代に蘭学を学んでいます。当時蘭学を学んだほどの人は諸藩からひっぱりだこだったんですが、たまたま島津藩に召し込まれて藩主のお庭役という、まあ側近に任せられた。で、当時の藩主は島津斉彬なりあきら、斉彬せいしんでございますが、この方がひとつの書物を正龍に渡した。みると紡

績、綿糸紡績技術に関する書物である。そこで、この技術を取り入れて、鹿兒島藩にも紡績事業をおこしたらどうかというんで、もくろみ書を書いた。資本はどこから、琉球貿易の利益を資本にあてるとかですね、どういう品物を織って、で、販路は大阪へもって行って売ればいい。これこれ程の利益があると非常に詳しい利益書を書きました。その頃鹿兒島藩では縞木綿をさかんに織っておりましたが、織手が一人で織る糸を紡ぐのに八人かかった。丁度イギリスの産業革命の初期のような状態なんですね。そういう状態なものですから島津斉彬は直ちにこの進言を入れましてですね、イギリスから機械を購入する。そして技師や熟練工を招聘する。こうして国の地所に紡績工場をつくりました。慶応二年のことです。これは日本の綿糸紡績業の先駆でございます。

次に製糸業に移りますと、この前も出口君から話がありました小野組ですね。あそこの番頭に古河市兵衛という方がおりまして、この人は京都の黒谷近くのお豆腐屋さんの息子なんですが、小野組に仕えてその才能をみいだされて、江戸店主任に任せられました。当時の江戸店というのは地方から集まってくる生糸を買って輸出することを専門としておったんでありますが、買うて出すのではつまらん。自分で作ったらどうかというんで築地にですね、これは蒸気動力でもってする製糸工場をつくりました。これが明治四年のことです。で、官営の富国製糸場が五年ですから、それに先だつこと一年ということになりました、これが機械どり製糸の先駆でございます。

ます。

それから田中久重という方がございます。この人は久留米藩のお細工師という人で、若い時分からくり仕掛けの人形を作って、笛を吹かせたり太鼓をたたかせたりしたといふんで、からくり儀衛門という通称もらったんですが、この人が齡七十を過ぎてから東京へ出まして、まず手はじめにするのが電信機械であります。電信機を作りだす田中製作所ついで、のをつくりました。そしてこの田中製作所ついでというのが基礎になつて、やがて今日の東芝が出来るのであります。

それから鹿児島藩の下級武士で川崎正藏という人は、はじめ蒸気船で海運業をやりましたが、その後蒸気船をつくる必要だといふんで、兵庫に川崎造船所を設置いたしました。それが今日の川崎重工の前身であることは申すまでもありません。

それから東京の町人で袋物商の森村市左衛門という人がおりますが、この人は、ある日横浜へ貿易の景氣をみに行つたところがお銚子のようなものが一輪差しになるとして盛んに輸出されておるのを見まして、ひとつ陶器の製造をやろうといふんで名古屋に陶器製造工場をつくりました。これが今日の日本陶器、いわゆるポーンチャイナで知られる日本陶器でございます。

それから海運業につきましては土佐のやはり下級士族で岩崎弥太郎。これが三菱蒸気船会社をつくつた、後の日本郵船の半分であります。

で、今度は地元の京都へ目を移しますと、まあ初代は長谷信篤というお公家さんだったのですが、二代目の知事さん、横村正直は長州の士族であります。で、この下に会津藩士で山本覚馬という、それからもう一人、京都の薬種商で明石博高。ひろたかと読むんですがこれらを顧問にしまして京都の殖産興業政策をうちたててるのであります。で、その殖産興業政策の、まず本部があります。これは今、河原町御池の京都ホテルのある土地。これは長州下屋敷の跡でございますが、ここに勧業場というのをつくりました。その勧業場の少し北の部分に染殿という、まあ平安朝のお妃のような名前ですけれども染殿というのをつくって、フランスから取り入れた染色技術を伝習する。それからその北、今の日本銀行京都支店のあるところが、もとは角倉の屋敷跡でございますが、ここに織殿っていうところをつくりまして、明治二年頃に京都府からフランスへ留学した西陣の織工がもって帰ったジャガードとかバツタンとかいうものを備えつけて、これまた伝習にあてる。それから御池通りをへだてて右側に製靴場。靴をつくる工場をつくった。それから今、ホテルフジタの前の道を北へつきあたったところに舎密局というのをつくりました。二階建の堂々たる建物でございますが、ここで化学の研究をやる。リモナーゼとかせっけんをつくっておりますが、このの師匠に來ましたのがドイツ人のワグネルという人でありまして、そのワグネルの頌徳碑が、今、岡崎の勧業館の敷地の東北の方にあるのを皆さんご存じだろうと思ひます。で、さらに今市役所のあるところには薬草園をつくった。それから荒神橋を渡りまして東南の方、広い

所に、今京大病院のあるところですが、あそこに牧畜場をつくりました。主として乳牛を養つてですね、お乳をとって販売したりなんかしております。で、こういう所は皆伝習場でありまして、その伝習生には京都市内はもちろんのこと遠く山陰から北陸ですね、それから山口あたりからも伝習生が来ておりました。こうして殖産興業を盛り上げようとしたんですが、まあ何しろ京都はご存じのように海に面していない所ですから工業都市として近代化することはなかなか困難でありましたのですが、とにかくこういうことをやりました。これが実は、政府の官営模範工場、いろいろなことを大久保利通はやりました。これがモデルになったというのを忘れてはならないのであります。そして明治十三年頃にこういった風な模範施設というものを売り払ったんですが、その代金が後に疏水開設の費用になる。こういった風ないわく因縁があるのでございます。

お隣りの大阪はどうかといいますと、ここはわりあい殖産興業の進みの少ないところでありまして、商売をしておれば儲かるから何も近代的産業に手を出す必要がない、とまあこういうことのでございました。これに喝をいれたのはやっぱり鹿兒島藩士の五代友厚という人でありまして、この人はこの大阪に産業を振興した人という事で、明治十一年でございませうか、大阪に商工会議所が出来ますと、初代の会頭になった人でございまして、この人の銅像が今、大阪商工会議所に建っておるはずでございませう。

こういった風なことで、最後にあげなければならぬのが何と云っても渋沢栄一であります。

この人は明治の初め、今でいえば埼玉県の豪農兼藍商の家に生まれたんですが、早くから論語を非常に愛読致しまして、何としても尊皇攘夷をやらねばならん、と。尊皇攘夷をやるのには幕府の身内の人間に、獅子身中の虫という風にならなきゃだめだ、というんで水戸の慶喜に仕えるのであります。ところがはからずも慶喜が十五代將軍になっちゃったというんで自然これが幕臣になつてしまふ。こと志に違つたという訳ですが、まあ、やがて大政奉還ということで徳川家は駿河七十万石の大名になる。七十万石で旗本三万騎を養わにやならんというのは大変なこと。貧乏世帯が多い。そこで渋沢は商法会所というひとつの授産施設を設けまして、「貧乏になつた侍達をなんとか食わしていかにならん」こういう事を言つた。そういう風な才能が今度は認められまして明治政府に召されて租税の守という、今で言えば租税局の長官のような役に就くんであります。そして明治五年に三井銀行と小野組との共同出資のもとに第一国立銀行というのを創設させるのであり、産婆役を務めたのであります。これが今の第一勧銀の前身であることは言うまでもありません。その後、自分は官吏としてとどまる身ではない。何としてでも実業界に入つて経済を振興させねばならん。というので六年に野に下る。それから財界の産婆役というんですか、経済の諸事業で渋沢栄一の息のかからんものはほとんどないのと、もっと広く社会事業にも非常な手をかしておるのであります、それで長生きしまして昭和の時代まで、昭和の労働争議が非常に活発になる、ほとんど戦前まで長生きしまして、長い間財界の大御所という風にうたわれた

人であります。

で、こういう風な人が企業家として社会の各方面から輩出したということは、誠にこの日本経済のためには非常に大きな意味をもったと思うんであります。

さらに、最後につけくわえたいのは、アメリカの学者でラニスという人が「シューペーター流の企業家というものは自己中心的な企業家だ」「ところが日本の企業家というのは共同社会中心的。コミュニティ・センタード。共同体中心主義の企業家だ」と、こういう風に批評をしておるんですが、誠に外国人としてはよくみておると思うんであります。日本人の人間形成の中でより大なるものに自分の身を捧げるといふ集中主義ということを申しましたが、それがそのまま企業家的側面だと、こう思うわけであります。

で、これでもって私の話は大体終わりますが、結びとして申し上げたいことは、日本の民主主義の将来ということでありまして、日本の民主主義というものは終戦後アメリカから与えられた切花のようなものでございます。西洋の民主主義はキリスト教というガツチリした根を持った民主主義であるのに対して日本の民主主義というのは根なし草であります。これにガツチリした根を与えてやらなければ民主主義の将来というものは枯れてしまふんじゃないかということが今から心配になるんであります。そこでどんな根をもつて来るかというところは私は今のところ儒教以外に

はない、と。他のものは何もない。仏教もだめだし、儒教以外にはない。で、三高同窓会あたりが、なんか儒教の塾というようなものを作ってくれないものかなあ、という風なことをひそかに念願しておる次第でございます。

どうもご清聴ありがとうございました。

(京都大学名誉教授)